

2. 知っておきたい「3つの不都合な真実」

① 豪雨の本当の中心地は「上流」ではなかった？

行政は川辺川の上流にダムを造ろうとしています。令和2年7月4日の豪雨災害のデータを分析すると、猛烈な雨が降ったのは川辺川の上流ではなく、球磨川の中流・下流域の山地に集中していました。つまり、どれだけ川辺川に巨大なダムを造ったとしても、中下流域で発生する局所的な集中豪雨による大洪水を防ぎ、命を守ることは構造上不可能です。

② 「流水型(穴あき)ダム」なら清流は守られるのか？

国や県は、普段は水を溜めない「流水型ダム」だから環境に優しく「清流は守られる」とアピールしています。しかし、専門家は次のようなリスクを指摘しています。一度大洪水が起きればダムに大量の石や砂が堆積し、それが雨のたびに動き出します。結果として、長期間にわたり強い濁水が発生し続けることになり、アユやヤマメが棲む豊かな生態系は壊滅的な打撃を受けます。

驚きの事実！行政と住民の「清流」の基準のズレ

国が環境アセスメントなどで示す清流の基準(SS25mg/l)は、私たちが測る「透視度」に換算するとわずか25cm(25cm先しか見えない濁った状態)。これに対し、住民が「本当に美しい清流」と感じる調査結果は透視度180cm以上です。行政の言う「清流を守る」という言葉をそのまま鵜呑みにはできません。

③ ダムを造る場所の地質が、実は最も不向き？

川辺川ダム予定地の周辺地質は、断層や破碎帯が重なる極めて脆い岩盤です。実際に、周辺の重要道路である瀬目トンネルなどでは、地盤が今なお動いている危険性が住民から指摘されています。軟弱で崩れやすい地すべり地帯に巨大なコンクリートの塊を造ること自体が、かえって地域住民を危険にさらすのではないかと危惧されています。

3. 満杯になったダムが引き起こす

「緊急放流」の恐怖

ダムの容量は有限です。近年、気候変動の影響で過去の想定を超える想定外の豪雨が多発しています。もしダムが満杯になれば、それ以上水を溜められなくなり、流入した水をそのまま下流へ流す「緊急放流」が行われます。過去の西日本豪雨災害(愛媛県肱川の野村ダム)などでは、この緊急放流によって下流の水量が急激に数倍へと跳ね上がり、逃げ遅れた住民が犠牲になるという悲劇が実際に発生し、現在も裁判で争われています。

ダムがあることで

「絶対に安全だ」という誤った安心感(正常性バイアス)が生まれ、避難を遅らせる原因にもなりかねません。



熊本県の説明図より

結びにかえて

私たちの未来を選ぶのは、

私たち自身

一度コンクリートで固めて失われた自然は、二度と元には戻せません。巨額の税金を投じて環境を破壊し、本当に命を守れるか分からないダムを造り続けるのか、それとも自然の仕組みを活かした持続可能な流域治水を模索するのか。この川の未来は、これから生きるみなさんの未来そのものです。「国が決めたことだから」と諦めず、何が本当に正しい事実なのかを知り、声を上げていくことが今求められています。